ラフカディオ・ハーンと石仏の美

――横浜から熊本までの時――

永田雄次郎

はじめに

「テラ　へ　ユケ！（“Tera e yuke!”）」(1)

ラフカディオ・ハーン Lafcadio Hearn（一八五〇―一九〇四）の宗教・仏像・石仏に関する、日本での実体験を伴う論考の始まりを告げる言葉こそこれであった。来日以前の憧れを満足させるための叫びでもあったのだろう。

わたくしがこの国への上陸第一歩は、まず横浜の外国人居留地から日本人町へと俥にのって踏み出した。これがそもそもの振り出しであった。(2)

一八九〇年四月四日、午前六時、英国の汽船アビシニア号から横浜に降り立ったハーンの日本での生活が動き出す。これ以降、彼の鋭敏な知性、感性は、終生、日本のさまざまな事物に反応する。ハーンの恵まれた能力は、それを文章に託し、西洋の人々に日本の魅力を発信し続けることにもなった。

彼の心を強く捉えた日本の事物の中に、仏像、特に石仏があるのに違いない。古拙の美を慈しむ心情の兆しが冒頭の一言にあると思われてならない。彼のその想いを来日第一日目から、松江、熊本に至るまでの道程の中に追い求め

て行こうとするのが本稿の主旨である。だが、筆者には仏教について深遠な思索への能力が欠如している。その結果、日本でのハーンの過ごした時の展開に従って、彼の熟慮の道の後方をあたふたとして歩むに留まることになるであろうと最初にお断りしておこう。まことに、覚束なき出立である。

（一）

来日したハーンは、二五〇ドルを持っていた。ニューヨークを去るにあたって、「翻訳などで稼いだわずかなお金を、カナダ太平洋鉄道の社長が支給してくれた」[3]ものであったらしい。その金をもとに人力車を雇い、「どこへでもいい、行けるところへ引っぱって行け」[4]と身ぶり（gestures）で命じている。この時以来、彼の話には、しばしば人力車が登場する。

ハーンが最初に雇った人力車の車夫は、「チャ（Cha）」と自らを呼ぶ。人なつっこく、仕事もそつなくこなす魅力的な人物であったらしく、彼のためにハーンは規定料金以上を支払うことになるが、そこには、ハーンの日本上陸の喜びの心を読み取ることもできよう。なにしろ、ハーンの眼には、道行く人が北斎の描く人物に映ったのである。

しかし、チャにハーンがこれから行きたくもある場所を伝えることはできない。『知られぬ日本の面影〔日本瞥見記〕（Glimpses of Unfamiliar Japan）』の「第一章　極東第一日」では、「私は西洋スタイルのホテルに戻らざるを得なかった」[5]とあるが、どのような表現をすれば自分の想いが伝達できるのかをホテルの人に教わりに戻ったのであろう。「テラ　へ　ユケ！」――呪文のような響きがハーンの目的を適えることになる。

このホテルはどこにあったのであろうか。ハーンの宿泊したホテルは、彼の経済状況を考え、山下町九三番地のJ・ケアリの経営する「インターナショナル・レストラン」の二階の安ホテルであるとする説が有力だが[6]、確証はな

く、横浜グランド・ホテル（海岸通り二〇番地）に逗留後、ケアリ・ホテルに移ったとの説も存在している[7]。

「テラ」とチャの叫ぶ声がして、ハーンはついに日本の寺院を横浜で目のあたりにし、石段をかけ登り、山門に歩を進める。富士山と寺院の景観の取り合わせに感激しながら、本堂に彼を招き入れた一人の若い僧侶に出会っている。後に、ハーンの松江赴任にまで同行する「アキラ」こと真鍋晃である。ハーンにとってアキラは、「とても卓越した英語を話す（exclams in excellent English）」[8]人物として、驚きを持って迎え入れられた。東京で学んだというアキラの英語を、「少し妙なアクセントではあるが、上品な言葉を選んで使っている」[9]ともハーンは評している。もちろん、英語を使用する民族に属し、文学に精通する者には当然備わった理解力であるが、この評価は、日本における英語教師として活躍する彼の資質の高さを示していよう。

真言宗の僧、真鍋晃こそは、ハーン来日直後、多大な影響を与えたと言ってもよい人物なのであるが、従来の研究書では、その経歴は不明とされる。その意味では、ハーン研究史上、「謎の人物」として第一に教えられるかも知れない。詳細な伝記的記述がないにしても、真鍋晃の重要な役割は、本稿で次第に明らかになれば幸いであると祈ることにしよう。

アキラは、一八九〇年（明治二三）の「千家宮司邸日記」で、「九月十三日夜、一、同日英国人ラフカジオ・ヘルン通辯人真鍋晃大社参拝候」[10]と記されているところにより、今日、「真鍋晃」と多くの研究書で紹介される。だが、ハーンの著書では、すべて「アキラ」と記される。

（二）

あなたはキリスト者（Christian）ですか。[11]

アキラのこの問いかけに、ハーンは正直に（truthfully）、「いいえ」と答えている。ハーンとキリスト教の関係について、アメリカ時代から生涯にわたって友人であったヘンドリック Ellwood Hendric（一八六一―一九三〇）の「ラフカディオ・ハーン」の記述に注目してみよう。

〔これは〕彼の大伯母と関係があります。彼女はアングリカン教会の信条からローマカトリックに改宗した人で、彼を司祭にしようと決心し、それに従って彼の学校教育をしつらえました。彼はそこから逃げ、後にアメリカに渡りましたが、常に母なる教会はそれを放棄した人々に罰を下すと信じていました。この恐れは、年を経るに従って和らいでいったと思います。（中略）私たちが一緒の頃は、アングリカン教会の組織や礼拝よりも、愛の集いや自由恩寵や突然の回心といった考えをもつメソジストを好んでいました。(12)

彼は、儀礼を重視するローマカトリックには反発を覚えながら、メソジストの愛の信仰に心を惹かれていたことは興味深いが、来日後のキリスト教への思いは峻烈を極める。

一つの例をあげてみよう。松江尋常中学校の英語教師時代、後日、ハーンの日本研究を助けた、俳人でもある教え子、大谷正信〔繞石〕（一八七五―一九三三）の英作文（題名・創造者 Creator）に対するコメントである。

さらにキリスト教国ではもっとも教養ある人々はキリスト教を信じてはいない。そしてキリスト教も無数の宗教に分かれてお互いを憎み合っている。ヨーロッパのすぐれた科学者も――高名な哲学者も――そして真に偉大な人物は信仰において誰一人としてクリスチャンではない。(13)

キリスト教に対する厳しい姿勢を貫く一方で、長男、一雄には聖書を読むことを勧める。

父の蔵書中には数冊の聖書並に基督教に関する幾冊もの書籍がありました。父は晩年私にバイブルを一まず旧約全書の方から――毎朝少しずつ読ませ始めていました。耶蘇教信者になる必要は更にはないがバイブルは一度は是非読んで置けと申すのです。(14)

何故なのであろうか。ハーンの没する年、一九〇四年（明治三七）八月、例年の焼津訪問の最後の時、同行の書生、新美資良にハーンは、「私基督の善き友人ですと思います」[15]と言いながら、その理由を話す。一雄は続ける。

父は笑って、世界で有名な宗教の本だから、読まして置いた方がよいと思ったからサ。（中略）ただ表面法衣を纏い、十字架を振り翳しながら終始心を欺瞞と詐取に向かって働かせているような幾分の末世の信者に対するよりは、私のように彼の心を熱く理解しながら別な地点に立っているこの一異端者の方により幾万倍かの好意を持ってくれていることと信じる、（以下略）[16]

ここに、ハーンのキリスト教への思いが吐露されていよう。彼こそは、「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう」[17]と主がアナニアに呼びかけた人物、サウロであったのだろうか。ハーンにとって、日本でキリスト教文化圏およびその文化を知ることの重要さの認識は消し去られていない。「彼は指の先まで芸術家でした」[18]とするヘンドリックの評価の正当性を見る思いがする。ハーンのアキラへの「いいえ」の返事の重味がここに存する。

アキラは、「それではあなたは仏教徒ですか」[19]と畳みかける。「かならずしも、そうではない（Not exactly）」[20]がハーンの答えであった。本エッセイ「極東第一日」は、その名の通り、来日の第一日目の出来事とされている。事の真偽はさておき、来日直後のハーンにとっては、仏教に心を寄せていたとしても、このようにしか応ずるほかはなかったのであろう。ただし、来日以前に彼は仏教に関する著作を読んでいた。アキラの見せた英訳本『仏教楷梯（Buddhist Catechism）』の著者をオルコット Henry Steal Olcott（一八三二―一九〇七）とサラリと言い当てることで明らかである。

この時の会話は、アキラが「自分はやがて、この寺を辞するので、ここでは再び会うことはない、お名前を伺っ

て、あなたの宿泊先に訪れる」[21]とハーンに言い、ハーンもアキラという名前を知ることで終わっている。この二人の交わりは、その後、松江にまで続くことになる。

他方、チャは、「テラ」という一言のみでハーンとのコミュニケーションを保っている。神社、寺院いずれも「テラ」の言葉によって長い一日の巡拝を終える。神社や仁王を初めて見つめるハーンの眼差しがそこにある。時間的に可能か否かは別にして、充実した一日をハーンはエッセイに描き切っている。

（三）

アキラが四月八日にハーンを宿に訪ねた[22]。仏生会の日である。二人は藏徳院の境内、本堂から離れた区域で卒塔婆を見た。瞬時にハーンは、そこが古い墓所であることを理解する。ここで、石塔の形態に心を動かす。そして、墓石の集まりの中に佇む石仏に眼を停めることになった。墓所、石仏、ハーンの好む景である。「怪談」好きのハーン、熊本で学校の裏の墓地に坐す石仏への愛を示すハーン、その最初に見た石仏がここに存在した。

瞑想（meditation）、説法（exhorting）の仏陀とともに、日本の子どもが夢を見ているような表情の石仏に出会っている。この顔つきをハーンは、「涅槃（Nirvana）」と解釈する。涅槃の中の夢みる子どもの表情が、仏像を通して日本の文化の真髄を見る彼の姿勢の根源となっているように思えてならない。六地蔵にも出会うことになった。日本の民間信仰の中でもっとも美しく、優しい姿の表現に心震える。この心の揺らぎこそが、途絶えることのないハーンの石仏への想いなのである。

ハーンとアキラの交遊は、ますます深まって行く。人力車を二台用意して、鎌倉、江の島を見聞する[23]。円覚寺、建長寺などの名刹、高名な神社を訪問し、多くの宗教美術の優品を見て歩く二人がそこにいる。長谷寺を出た後、都

であったことは今は昔と感じさせる荒れ果てた地域で、古い墓石などとともに、夢の中にあるような表情の阿弥陀仏や、幽かに微笑をたたえる観音像が立っていた。道の端に立つこれらの像は、言うまでもなく、石仏であったろう。実に美しかった。

さらに歩を進めると、荷馬車にでも当って壊されたのか、六地蔵の内の一躯が、形が傷つけられて地面に倒されているのをハーンは見てしまった。彼がそこで大きな溜息をついたことは想像に難くない。優美な姿に魅了されつつも、破壊されても修復するに値しないかのような取り扱いを受ける、名もなき石仏に心を痛めるハーンが浮かび上がってくる。

来日以前まで憧れ続けた、横浜上陸以後、自分をここまで育ませてくれたと考えていた日本文化を、夢見がちに、遙かに思い遣りつつ、壊された石仏を見るといった現実に、少しく日本の将来を案ずるギリシア生まれの文学者あるいは芸術家のハーンを発見する端緒がここにあると論ずるのはやや大袈裟なのであろうか。

この時、彼の眼には日本に覆いかかろうとしていた西洋文明の影が未だ見えていなかったのだろう。

（四）

横浜に到着後、ハーンは日本で職に就くことを望んだ。一八八四年から翌年にかけて、ニューオリンズで開催された万国工業兼綿花百年記念博覧会で知り合った文部省事務官、服部一三（一八五一―一九二九）の名を添えて、東京帝国大学文科大学教師のチェンバレン Basil Hall Chamberlain（一八五〇―一九三五）に就職依頼の手紙を来日直後に出すことにした。この手紙については、来日した日に書いた[24]、来日の翌日に書いた[25]、アビシニア号に乗船中に書き上陸後すぐに投函した[26]、などの諸説がある。来日以前から日本で活動しようと思っていたのか、来日直後、

日本に魅せられこの地で活動しようと考え始めたのか、興味深いが、ここでは、それには触れないでおこう。

いずれにしても、一八九〇年四月六日付のチェンバレンからの返信がハーンに届けられる。この時の彼の住所が横浜九三番地インターナショナル・ホテルとなっている。宛名からすると、ハーンが横浜で宿泊したホテルは、すでに述べた、ケアリの「インターナショナル・レストラン」二階の安宿ではないかとの推論が成立する。

『中国怪談集（Chinese Ghosts）』であなたの名前を知っていると手紙を書き始めたチェンバレンは、ハーンの就職の斡旋に奔走した。チェンバレンとハーンの直接的な友人関係の始まりである。その後、よく知られるように、ハーンは島根県尋常中学校、師範学校の英語教師として松江に赴任することになるが、同年八月下旬に横浜を立つ。その時も、英語に堪能な真鍋晃が通訳として同行する。

「盆市で（At the Market of the Dead）」では、鎌倉から帰ったある日、夕方午後五時過ぎ、ハーンの許を訪れたアキラが部屋に入ってこようとする様子が描かれている。アキラの表情を「まるで地蔵のような微笑をたたえて」[27]とハーンは捉えた。ハーンの友人への信頼と安堵に対する最高の気持ちを表わしていると思われよう。石仏への想いに一致する。

横浜でハーンは新たに五〇〇円所持していた。これは、アメリカ合衆国海軍の主計官で、彼の来日当時、日本に滞在していたマクドナルド Mitchell Charles McDonard（一八五三―一九二三）から貸与された（後に返済を辞退する）ものである。来日直後の所持金二五〇ドルと合わせても、四月から八月までの見学の日々とでも呼べる生活でかなり使ってしまった。これから真鍋晃とともに松江に行くのには旅費も安くはない。一人およそ四〇円、二人であるので八〇円かかる。その金額を工面する必要が生じた。

彼はやむなく毎月二六日に支給される松江の学校の俸給を前借りし、彼の地に赴くことになる。汽車で東京から姫路（あるいは神戸）まで行き、その後は人力車で四日間を要する、中国山地を越える旅であった。

それから、宮がある。神道の宮だ。そして、そういう神社のまえには、かならず石か木でつくった、大きな文字のような形をした鳥居が立っている。しかし、このへんはまだ、なんといっても仏教の方が優勢を占めている。どこの丘の頂上にも寺がある。[28]

神道の国、出雲に近づくことを示唆しながら、まだ、播磨地方であろうか。道端に、一里塚のように立ち並ぶ仏陀や観音の石仏を眼にしている。それらをハーンは、「どこへ行っても、いたるところに心やさしい信心のしるしが見られる」[29]とし、その親しげな美しさを、「道のほとりの人目につかない草むらのかげから、さまざまの偶像が道行く人にほほえみかけている」[30]と記す。彼にとって、一里塚のような石仏が次々と、小さきものの美しさを内側に秘めながら自らの前に姿を現わすことを期待していることが読み取れよう。

ハーンの眼は鋭い。一日ごとに、石仏が姿を消すことを感じ取る。神道の国が、もうそこまでやって来ていることを悟り出す。石仏に代り、庚申塚はいまだに彼とともにあっても、鳥居というものを多く見ることを体験し始めている。『知られぬ日本の面影』の第六章に該当する「盆踊り（Bon-Odori）」は、横浜など東の国で多く眼にした立像ではない、蓮の花の上に坐す地蔵の石仏の姿に少し不思議を感じることで終わっている。この変化を楽しみながらハーンとアキラは松江を目指した。

（五）

二人は松江に到着した。アキラもしばらくは通訳として松江にいた。少なくとも、一八九〇年九月十三日まではこの地に住することは、前述の「千家宮司邸日記」で確認される。

「杵築雑記(Notes on Kitzuki)」は、一八九一年七月二〇日付の Akira is no longer with me.[31]で始まる。no longer

は、単に「もはや」ではなく、しばしの時が過ぎた感を私たちに与える。板東浩司は、不確かな推定としながらも、一八九〇年九月中旬に真鍋晃は松江を去るとしている[32]。その理由も不明であるが、この地のハーンの通訳で、彼を理解しようとしていた松江尋常中学校教頭である西田千太郎（一八六二―一八九七）の存在が浮かんでくる。

アキラ以上に英語に通じていたであろう西田はハーンの終生の友ともなる。アキラも横浜の寺を近々出て行くと「極東第一日」ですでに言っている。この両者の事情が、アキラをして松江を去らせる要因となったのではないのだろうか。ハーンがアキラの人柄に疑いを持ち解雇したとの説もある[33]。だが、ハーンは次のようにも語っている。そこにはアキラへのハーンの愛情の情を見ることであろう。

仏教雑誌の編集をするのだといって、神聖なる仏教の都、京都へ行ってしまった。――自分は神道のことは何も知らないから、出雲にいても大してお役に立つまいと、再三辞退していたのであるが、さて、いなくなられてみると、わたくしはすでに迷い子になったも同然の感がする。[34]

時の経過の内に、ハーンの語る思いはいかなるものか、真偽の問題は多少存していようとも、この文学者の寂しさを滲ませた告白は真実であると信じてみたいのである。横浜、鎌倉の寺院、神社、さらには松江までの道を同行したアキラである。これまで日本で仏教および仏教美術などを実体験する時、必ずと言ってよいほど、その脇に立っていたアキラは、ここでハーンの前から完全に姿を消したのである。彼こそは、松江での別れの時まで、石仏を眺めるハーンの眼にもっとも近く立ち、品の良い英語で語りかけた青年であったに違いなかろう。

アキラの辞去の理由の一つともなった神道の国、出雲の文化圏にある内は、当然のことながら、石仏についてハーンはほとんど記すことはない。ハーンの研究で大きな意味を持ち、多大な成果をもたらせた松江時代は、一年二ヶ月であった。一八九一年一〇月十九日、ハーンと小泉セツ（節子）は春日駅（現、ＪＲ熊本駅）で、第五高等中学校の嘉納治五郎（一八六〇―一九三八）校長に出迎えられるのである。

（六）

ハーンが新たに赴任した熊本の第五高等中学校本館の建物は、現在、「熊本大学五高記念館」（図1）となっているが、その裏手に小高い丘がある。小峯（峰）墓地（現、熊本市営小峰墓地）であり、そこには、熊本時代のハーンがもっとも愛した石仏（阿弥陀仏）（図2・3・4）がある。この石仏については、『東の国から（Out of the East）』の中の「石仏（The Stone Buddha）」において詳しく知ることができる。同時に、この石仏は熊本時代のハーンを象徴するものとして、この地のハーンの活動を示す案内書などに、必ずと言ってよいほど写真を伴って紹介されることが多い。

そのすぐそばのところには、蓮華の花のうえに坐している仏像も一体立っている。この仏像は、加藤清正時代から、ここにずっとこうして坐っているのであって、じっと瞑想にふけっているようなそのまなざしは、はるか脚下の学校と、その学校のそうぞうしい生活を、半眼にひらいたまぶたのあいだから、しづかに見下ろしながら、身に創痍をうけながらも、なにひとつ、それに文句のいえないような、完爾とした微笑をたたえている。もっとも、この微笑は、もともと、これを彫った彫り師が刻みつけた表情ではない。長い年月の風霜の、苔と垢とに形をゆがめられてできた表情である。(35)

ハーンは、いつ、この石仏を発見したのであろうか。エッセイ「石仏」では、学校での授業時間の中で一時間ほどのひまを見つけたのでそこへ行ったと書く。小峯墓地全体について、彼は広く眺望の利くところであると言う。現在、周囲にかなり家が立ちこめて、その風情は変化しているが、西側の広々とした空間（図5）は、往時を思わせる豊かさを持ち合わせている。

一八九二年十一月にハーンはヘンドリックに手紙を送っている。「学校では昼食のため三〇分の休みがあるが、私は食事をしないで、学校の裏の丘に登ることにしている」[36]と綴る。同年一〇月二三日付、西田千太郎宛の手紙の「私はもう食事に行くこともありません。全体としては、孤独を喜んでいます」[37]との記事とも一致する。丘の上での一番の休息が石仏とともにあることが理解されよう。

一八九二年十一月であれば、ハーンが熊本に来て一年が経過している。それよりもかなり早い時期に、蓮華座に坐す阿弥陀如来の石仏との邂逅があったのだろう。これは、同時に、第五高等中学校での彼の孤立の時がすでに生じていることも意味している。

本像が加藤清正時代の制作か否かについては丸山学がすでに明らかにしている[38]。蓮華座の下には、正面に「宝暦六歳時　丙子　十二月日　大乗妙典一石一字塔」の銘の入った石の部分がある（図6）。銘文から、その石部は宝暦六年（一七五六）に制作されたことが知られ、一石一字塔と石仏本体が制作当時からこの形式であったならば[39]、石仏も江戸時代中期の作例であると考えられる。加藤清正時代とは開きを認めるべきであろう。

瞑想にふける石仏の視線の先は、すぐ下の学校の近代的な建物と、学内の騒々しい（tumultuous）生活にあった。西洋風の近代化と喧騒――ハーンのもっとも嫌悪する対象である。来日直後には見えなかったものが熊本で見え始めている。西田宛の一八九三年二月十九日付の手紙には、当時の熊本を嫌う理由として、(1)近代化されている、(2)あまりにも大きすぎ、寺院や建物に珍しい習慣がない、(3)醜悪である、(4)不案内で、文学的題材を得ることができない、との四点を掲げる[40]。石仏はこれとは正反対の方を向いているとハーンは見た。悪意を持って語られる機械の影、煙突の影、偽善の影などの「西洋文明の影」と対峙する「古き、良き、豊かな日本」の象徴である、何一つ文句も言わず静かに坐す石仏の姿に親近感を覚えている。

慎み深い微笑をたたえた件の石仏の顔にハーンの眼と手が動き始める。

図 1　熊本大学五高記念館

図 2　小峯墓地の石仏Ⅰ（仏像）

図 3　小峯墓地の石仏Ⅱ（全体像）

図 4　小峯墓地の石仏Ⅲ
（全体像・側面）（中西真美子撮影）

図 5　小峯墓地より見た西側の景

図 6　小峯墓地の石仏Ⅳ
（一石一字塔）

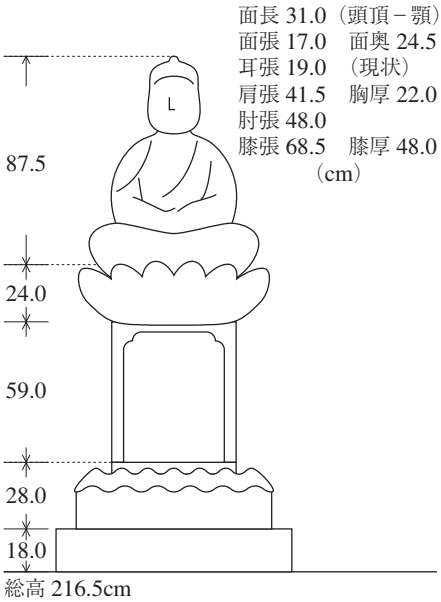

図 7　小峯墓地の石仏の寸法
（中西真美子作成）

図 8　小峯墓地の石仏Ⅴ（台座部）

よく見ると、この仏像は、いまはもう、両手も欠けてしまっている。わたくしは、なんだか気の毒になってきて、仏像の額にある、小さなしるしのイボのまわりの苔を爪でかいてとってあげたらと思って、手でそれをかいてみた。古い「法華経」の文句をおもいだしながら。[41]

石仏の顔の白毫のあたりの苔をハーンは払い除ける。その時、彼は「法華経」の「序品」の、「文殊師利　導師何故　眉間白毫　大光普照（以下略）」[42]の言葉を思い出していた。美しい情景である。だが、この場面を思うにつれ、現在の石仏の置かれた状態を考えると小さな疑問も生じて来る。

この石仏は板石から頭頂まで総高は二一六・五cmある（図7）。そうなると、ハーンが手を伸ばせば白毫まで届くのかどうかが問題となる。彼の身長は、小泉一雄が五尺二寸と記す[43]。一六〇cmに満たない。一六二cmの筆者が試みたが不可能であった。この描写は偽りと考えるのがよいのだろうか。ここで石仏の板石に注目しよう。高さ一八cmのコンクリート製で、次の一枚岩の反花座の材質とは明らかに異なる後補と考えられる（図8）。その板石に乗れば、筆者の手は白毫まで達する。もちろん、ハーンにも可能である。板石を除けば本文の記述が正しいものに見えてくる。問題は解決したのかも知れない。

なおも、一抹の疑問は消え去らない。熊本大学五高記念館に、一九二八年（昭和三）四月より一九三七年（昭和十二）三月まで、同校で教鞭をとったマーター J. G. de Martyr が石仏の前に立つ写真が所蔵されている。石仏自体はハーンの見たものと同じではあるが、もう少し高さが低いようにも見える。少し窪んだ地点に置かれていたのだろうか、一石一字塔がその時にはなかったのかなどと、やや大胆な考えが浮かんで来た。この状態であれば、より容易にハーンは白毫についた苔を落とせるのではないかとも思われるのである。熟考の時を持ってみたくなる。

いずれにしても、熊本時代のハーンにとって、心置きなく、静かに語り合える友人としての石仏がここに存在したのは事実のようである。「私は決してここでは一人ではいない。（I am only there never alone.）」[44]とヘンドリックに

叙しているではないか。

（七）

小泉セツ（節子）の「思い出の記」には、ハーンとセツが熊本時代に散歩をしたことが記された箇所がある。

熊本で始めて、夜、二人で散歩いたしました時のことを今も思い出します。或る晩ヘルンは散歩から帰りまして「大層面白いところを見つけました。明晩散歩いたしましょう」とのことです。月のない夜でした。宅を二人で出まして、淋しい路を歩きまして、山の麓に参りますと、この上だというのです。草の茫々生えた小笹などの足にさわる小径を上りますと、墓場でした。薄暗い星明りに沢山の墓がまばらに立っているのは見えます。淋しいところだと思いました。(45)

エッセイ「石仏」、ヘンドリックへの手紙の記事を考えると、これが小峯墓地であると推測するのは十分妥当性を持っているように思われる。そうすれば、セツによって小峯墓地の情景がより詳細に描き出されたこと、二人は自宅から徒歩で目的地まで行ったことが明らかになる。

ハーンは熊本に来ると、一八九一年十一月二五日、手取本町三四番地に家を借り、翌年十一月下旬に坪井西堀端町三五番地に転居している。どちらの家から夫妻は散歩に出かけたのであろうか。一八九三年八月三〇日付のチェンバレンに宛てた手紙には次のように書かれている。

私は「石仏」と題されるスケッチを書いています。それは、私の勤める学校の後ろの墓地にある古い釈迦仏の足許で永遠の神秘について夢想（revery）とでも呼べるものです。この執筆に対する思いは、一年以上前より私の心の中で次第に大きくなって来ました(46)。

一八九三年八月より一年前、ハーンは最初の居宅、手取本町にいた。そこから二人は散歩したものと思われる。小峯墓地までは約三キロ（二マイル）、藤崎宮を通り、今も遺る黒髪の村道の傍の墓地などを見つけながら、片道約五〇分を要して小峯墓地に到着したのであろうか。その時、どのような語らいがそこにあったのかは定かではないが、二人は丘の上で蛙の声に耳を澄ませていた。石仏の坐す丘の上の墓地の風情は、丸山学が論じる「熊本のヘルンにとっては魂の安息所」(47)であったに違いないであろう。それは、決して熊本時代はハーンにとっては不幸ばかりではなく、楽しい時でもあったことを物語っている。

因に、坪井西堀端町からは約二・四キロである。

おわりに

石仏、もう少し広がりを持たせて仏像についてのハーンの論考としては、『心（Kokoro）』に収められる「神々の終焉（In the Twilight of the God）」などが存在する。それらについて語るには紙面が尽きた。本稿は、石仏を中心に、彼が憧れの日本到着の後、横浜で見たもの、松江への旅立ち、西洋化された日本に対する嫌悪感が生じ始めた熊本での小峯墓地の石仏を前にしたハーンの瞑想もしくは夢想を追い求めることのみに終始した感がある。

最後に、彼の日本研究の集大成と呼ぶべき『日本――一つの試論（Japan : An Attempt at Interpretation）』中の「仏教の渡来（The Introduction of Buddhism）」の一節から石仏の意味を探ってみよう。

もちろん、名画や彫刻の傑作は大きな寺院でなければ見られなかったが、そのうちに仏師たちは、地方のごくへんぴなところへも、仏陀や菩薩の石の像を置くようになった。まず最初は地蔵の像がつくられた。今でも、それは全国いたるところの路傍から、旅人にほほえみかけている。(48)

アキラとともにハーンが横浜、そして松江までの道中に見た景色であった。素朴な造形、表情を持つ石仏の美の発見は、西洋文明の影を感じ、それに従うかのような日本としての熊本に幻滅しつつあるハーンの心の友となる小峯墓地の石仏への愛慕につながって行く。

墓地はしだいに夢みるような仏陀や菩薩の像――石の蓮華の上に坐して三昧の微笑に半眼を閉じ、完爾としている死者の保護者たちの像で、だんだんにぎやかになってきた。[49]

ここにおいて、ハーンは仏教思想を披瀝はしない。古拙だが、西洋文明の力を遙かに超えた日本の芸術的な美を、石仏を通して私たちの前に微笑みながら浮かび上がらせたハーンの感受性に感服せざるを得ない。果たして、彼は仏教の教理の中にその美しさを見ようと試みたのであろうか。

ハーンの親友であった雨森信成（一八五八―一九〇六）は、「人間ラフカディオ・ハーン」の中で、彼を「徹底した不可知論者」[50]と断じ、「そもそもハーンは宗教的信仰というものを全く持っていなかった」[51]と結論づけている。そこで、もう一度、ヘンドリックの言葉を繰り返そう。

彼は指の先まで芸術家でした。[52]

註

(1) Lafcadio Hearn : Glimpses of Unfamiliar Japan, I. My First Day in the Orient, Houghton Mifflin Company 版（1922）（一九八八年　臨川書店より復刻）を使用

(2) 小泉八雲著・平井呈一訳『日本瞥見記（上）』、「第一章　極東第一日」（一九七五年　恒文社）

(3) 工藤美代子『神々の国　ラフカディオ・ハーンの生涯〈日本編〉』（二〇〇三年　集英社）

(4) 註(2)に同じ

(5) 註(1)に同じ

(6) 註(3)に同じ
(7) 板東浩司『詳述年表　ラフカディオ・ハーン伝』（一九九八年　英潮社）
(8) 註(1)に同じ
(9) 同右
(10) 梶谷泰之『へるん先生生活記』（一九九八年　恒文社）
(11) 註(1)に同じ
(12) エルウッド・ヘンドリック著・銭本健二訳「ラフカディオ・ハーン」〔平川祐弘編『小泉八雲　回想と研究』（一九九二年講談社）に所収〕
(13) アラン・ローゼン、西川盛雄『ラフカディオ・ハーンの英作文教育』（二〇一一年　弦書房）
(14) 小泉一雄「父『八雲』を憶う」〔小泉節子　小泉一雄『小泉八雲　思い出の記　父「八雲」を憶う』（一九七六年　恒文社）に所収〕
(15) 同右
(16) 同右
(17) 『新約聖書』（新共同訳）「使徒言行録」第九章十五節
(18) 註(12)に同じ
(19) 註(1)に同じ
(20) 同右
(21) 同右
(22) Lafcadio Hearn : Glimpses of Unfamiliar Japan, III. Jizō, Houghton Mifflin Company 版（前掲）
(23) Lafcadio Hearn : Glimpses of Unfamiliar Japan, IV. A Pilgrimage to Enoshima, Houghton Mifflin Company 版（前掲）
(24) 註(7)に同じ
(25) 註(3)に同じ
(26) 註(10)に同じ
(27) Lafcadio Hearn : Glimpses of Unfamiliar Japan, V. At the Market of the Dead, Houghton Mifflin Company 版（前掲）

(28) 小泉八雲著　平井呈一訳『日本瞥見記（上）』、「第六章　盆おどり」（前掲）
(29) 同右
(30) 同右
(31) Lafcadio Hearn：Glimpses of Unfamiliar Japan, XI. Notes on Kitzuki, Houghton Mifflin Company 版（前掲）
(32) 註(7)に同じ
(33) 板東浩司『詳述年表　ラフカディオ・ハーン伝』（前掲）では、桑原羊次郎『松江に於ける八雲の私生活』（一九四〇年　島根新聞）の説を紹介している。
(34) 小泉八雲著　平井呈一訳『日本瞥見記（上）』、「第十一章　杵築雑記」（前掲）
(35) 小泉八雲著　平井呈一訳『東の国から・心』、「石仏」（一九七五年　恒文社）
(36) Lafcadio Hearn：Life and Letters 2, Houghton Mifflin Company 版（1922）（一九八八年　臨川書店より復刻）を使用
(37) 斎藤正二、原一郎、内藤史朗、池野誠、藤本周一、山下宏一訳『ラフカディオ・ハーン著作集　第十四巻』（一九八三年　恒文社）に所収されている「書簡Ⅰ・1　西田千太郎あて書簡」（池野誠訳）を使用
(38) 丸山学著、木下順二監修『小泉八雲新考』（一九九六年　講談社）
(39) 本石仏は、制作当時よりこの形式であったのか、後世、石仏と一石一字塔を合体させたのか、疑問が生じたのは事実である。だが、本稿に関する熊本での調査に同行していただいた、崇城大学、中西真美子専任講師から、この形式は熊本では数多く存在することを他の例を示しながら指導していただくことになった。
(40) 註(37)に同じ
(41) 註(35)に同じ
(42) 坂本幸男、岩本裕訳注『法華経（上）』（一九六二年　岩波書店）
(43) 注(14)に同じ
(44) 注(36)に同じ
(45) 小泉節子「思い出の記」〔小泉節子　小泉一雄『小泉八雲　思い出の記　父『八雲』を憶う』（前掲）に所収〕
(46) Lafcadio Hearn：Japanese Letters, Letters to Basil Hall Chamberlain, Houghton Mifflin Company 版（1922）（一九八八年　臨川書店より復刻）

(47) 註(38)に同じ
(48) 小泉八雲著　平井呈一訳『日本――一つの試論』（一九七六年　恒文社）
(49) 同右
(50) 雨森信成著　仙北谷晃一訳「人間ラフカディオ・ハーン」〔平川祐弘編『小泉八雲　回想と研究』（前掲）に所収〕
(51) 同右
(52) 註(12)に同じ

（付記）
本稿の成るにあたっては、熊本での調査にご同行いただいた崇城大学、中西真美子専任講師から、多大なるご指導、ご示教をいただくことになった。また、鹿児島大学、下原美保教授からも、熊本で、筆者の研究に対して、いつも励ましをいただいた。末筆になってしまったが、お二方に深く感謝したく思っている。

――文学部教授――